

日本ヴィクトリア朝文化研究学会 設立20周年を越えて

日本ヴィクトリア朝文化研究学会
会長 中島 俊郎

私たちの学会が20周年をむかえたのは何とも慶賀なことである。このように周期を区切った見方をおして、私のなかで去来している問題が喚起されてくる。それは「ヴィクトリア朝はいつ終焉をむかえたのか」という問いで、たえず突きつけられる問題である。巨視と微視を交差させ、対象とする文化現象を並行化してみると見えてくるものがあるだろう。

戦後、1950年を前後してヴィクトリア朝文化を検証する大きな試みが二度なされた。「国の自叙伝」と謳われた1951年の英国フェスティバル (Festival of Britain) は、1851年のロンドン万国博覧会を多分に意識した試みであった。両者には国民像、国家像を生み出そうとする強い意志が共通するが、前者では「進歩とは何か」という問題が尖鋭化されており、進歩をかざし、騎虎の勢いあふれた旧万国博覧会とは異なる点が数多く見られた。まず英国フェスティバルは、第二次世界大戦におけるイギリスの勝利を祝い、国家の復興を宣言せんとするもので、イングランド、スコットランド、ウェールズなど全土で九つにおよぶ展覧会場で催され、同時に23もの芸術祭が開催されたのであった。なかでも芸術、産業、技術、建築が展示されたロンドン・サウスバンクの会場には850万人もの観客が詰めかけた。さらに地域レベルでは、全国2,000近い市町村で何らかのフェスティバルが企画、実施されたのである。そこにはヴィクトリア朝文化に鑑み、国のアイデンティティを再構築しようとする努力があふれていた。

また、1948年に4ヶ月間、BBCはヴィクトリア朝を再検討するプログラムをラジオで連続放送した。反動の時期を越えて、「神に対する人間」、「人間と自然」、「人間と人間」、「女性」、「人間と国家」という問題系が立てられて、各論において「マッコレーの楽天主義」(G.M.トレヴェリアン)、「進化論と人間」(ジュリアン・ハックスレー)、「寛容」(パートランド・ラッセル)、「ヴィクトリア朝のリベラル精神」(G.M.ヤング)など83番組のなかでヴィクトリア朝文化が縦横に論じられた。そこに提示された「新しいイギリス」像は、イギリス人とその伝統に関する古くて深い物語と、科学に刺激された未来の夢とが融合されていたのである。つまり未来と過去は対立するものではなく、相互に補完しあうものであるという認識が改めて確認されたのであった。

不可逆的に進行するヴィクトリア朝という文化現象はたえず検討されてきたが、今後も変わらず議論を重ねていくであろう。記念すべき20周年はその通過点であり、これからもともに文化研究の意義を考えていきたい。